
詩集 ~ 気分のままに書かれるもの ~

稲波 緑風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集 ～気分のままに書かれるもの～

【Nコード】

N5170W

【作者名】

稲波 緑風

【あらすじ】

気ままにつづられる詩をまとめてみた

世界に反逆してみると言葉が一番敵だった(前書き)

言葉って難しいものですね

世界に反逆してみると言葉が一番敵だった

エグエンディファルト

イストアトリアス

リンミグランドバリド

キクルウイストアビ

シジュグデアリサ

トブガムンド

ジブグルグ

タトコミバロヌス

シシアグアランザ

ドンドバルンド

ジジガンブルフ

シアルコーフィ

ルアルオプコート

ジエンヴェドゥ

ガゴデアクウシイ

フブルミュスユピント

ただ言葉の羅列

何を読み取るかは個人の自由

初めは言葉も記号の一つでしかなくて
読み取るのに時間をかけたに違いない
だから今も言葉は難しく

人間と人間の間を行きかっつて

時折 どこかに行つてしまふんだ

そんなことはないなんて

誰も言えないよ

だつてそれなら

宗教がここまで大きくなることも

企業があふれることも
組織ができあがることも
天才が生まれることも
学校があることも
なかったに違いない
疑問に思うのは
うまく言葉が来なかったせいだ
だから世界の物事にも
疑問があるんだって
気づいてしまったに
違いないんだよ

世界に反逆してみると言葉が一番敵だった（後書き）

自分との戦いが一番の地獄です。

でも、それが一番やりがいがあるんじゃないかなあ。

他人とのやり取りがづらい日々の中の作品です。

ただ、現実逃避したいだけなんですけどね。

2011/09/07

僕は僕で 君は君で

「なんだって、そう同じことを繰り返すんだ？何度もやるなといったよな？」

罵声ではなく淡々と諭すような口調

「学んでないんじゃないかって、周りに言われても仕方ないぞ？」
の調子なら」

諦めのように ただ事実を告げているだけのようで

「少しは直していこうな」

お人好しと言われるような会話の終わり

「あの人の真似は僕にはできない。何度やっても間違える」

諦めの独白 悲しみはない

「でも、みんなにはわからない。僕はちょっとだけうまくなってる」
ただの事実確認 自分に言い聞かせる

「気づいてもらえるまで、頑張ってみよう」

ちよっとした目標 ささいな決意

「ねえ、なんでこんな隅っこにいるの？」

純粹な疑問 自分ではないことへの興味

「誰がどこにしようがお前には関係ない」

ねじ曲がった回答 他人との大きな距離

「どっかけがしたの？」

無知ゆえの寄り添い

「あっちいけ 近寄るな」

温もりへの拒絶

どうやったってみんな同じ人間にはなれないんだ
なのにそれを忘れてしまう

覚えていたって自分と違う考えなんか浮かばない
なんて不便なんだろう
生きていくのが難しいんじゃないと思う
みんながみんな
自分の考えだけで生きているから
大変なだけなんだよ

僕は僕しかいなくって
君は君でしかなくって
それ以外の何物でもないのに
僕は君を僕だと思って
接しているって
僕はわかっているのだけれど

僕は僕で 君は君で（後書き）

自分のやりたいことを貫き通せる人がうらやましいと思う

他人に優しくできる人をすばらしいと思う

だから、どちらも妬ましい

でも、人は人 皆 他人

そう割り切れればいいのと思う

10

2011/09/

とまどいに似たため息

とまどいに似たため息
深呼吸よりも深い呼吸
廃墟の中にたたずむ時計
時は刻み続けられる
太陽の逆転
月の公転
溶け出した蜜が
火を追いかける
眠るものなし
ため息の視覚
拡張されし空間
努々忘るるな
木枯らしは春一番に変わる
進化せし時間
退化せし人間
恐るることを忘れ
畏るることを忘れ
笑うことを忘れ
嗤うことを忘れず
一種類のものになる
個は持たず
衆は持ち
何を持つて
未来となすかも知らず
盲目の老人が
国の舵をきる
聾啞の若者が

眠りをむさぼり
誰も満足なものなし
動かざるもののみ知れり
怠けし者のみ知れり
稀有なる道のみすえ
歩むすべを知る
風が吹き荒れし稲穂の海の上
雲がごとく踏み荒らす
何を持ちて生く
疑問すら持たぬ旅人
清々しき水を飲む
濁れし川の上側
幻の感覚
必要以上のものを求め
命は容を留めず
死した後
名は決して残らず
欲望の道を歩むこと
安きことほかならず
理性の道を行くもの
神が手も要らず
見るは光のみ
掲げし歌唄は闇
すべてを持ちて
畏るることを知る
心は闇
されど理性の道行くもの
手は光
彼らにはただ命のみ
それは死して後も名を残す

迷いも間違いも
彼らは楽しむ

とまどいに似たため息（後書き）

すみません、手抜きさせていただきます。

2009/03/13に書いたものです。

加筆修正一切しておりません。

生きている自分に疑問を抱く

なぜ私のような無能者むのうものが

この美しい世界に息づき

この人生を永ながらえているのだろう

なぜ私のような落伍者たふしつやが

この素晴らしき世界に息づき

この時間を得ているのだろう

祝福を受けている人が多くいる中で

なぜ私にもその欠片かけらが

受けられるのだろう

もしも「私が神だ！」と叫んだならば

私の意思通りに世界は動くというのだろうか

死んでしまえばいいと思う

そんな考えににうなずく人も居よう

しかしこんな愚か者おろにさえ

「死ぬな」という人がいる

その言葉にとらわれて息をする

なぜ私のような無力な人間が

この優やさしき世界に息づき

この彩りの一片いっぺんに属まはしているのだろう

時は刻み続ける 一瞬も止まることなく

無むも有あも半端はんぱにあつて

完璧なる調和をなす

なぜ私のような異端者いたんしゃが

この麗うるわしき世界に息づき

この正常に浸ひたっているのだろう

私は何者なのだろう

生きているのだろうか

自問するものに正解など見いだせない

生きている自分に疑問を抱く（後書き）

このような考えはありでしょうか？

「ない」というのであれば、私は心安らぐでしょうか？

いいえ、このような考えをもって私は私であるのです。

否定の考えを聞いても、肯定の考えを聞いても、

私はなんら変わらないでしょう。

それが「私である」と知っているのですから

この詩は一度消えてしまったものです。

完全に再現されたものではありません。

しかし、作者は同じです。感情は同じままです。

なので、消えてしまった詩がこの詩とかけ離れたものではないこと
だけ

知っていてください。

これが、今の私の考えなのです。

11 / 09 / 13

20

花咲く町の片隅に（前書き）

とある地方紙に投稿したものです。ちなみに掲載はされていません。

花咲く町の片隅に

花咲く町の片隅に

小さな少女が一人居て

虹架かる町の少年に

愛とはいえない想いを抱^{いだ}いていた

虹架かる町の中ほどに

小さな少年が一人居て

星降る町の少年に

友情以上の想いを抱^{いだ}いていた

星降る町の片隅に

兄たる少年が一人居て

妹たる少女と弟みたいな少年を

真綿みたいな愛情で守っていた

花咲く町の片隅の

少女が乙女になったとき

虹架かる町の中ほどの

少年だった青年と一緒にになった

星降る町の片隅の

兄たる少年だった青年は

町一番の綺麗な乙女と

幸せそうに見守っていた

花咲く町の片隅に（後書き）

えっと、今回も手抜きです。すみません。

2011/07/06

悲観的思考の持ち主ゆえに心は暗く暗く落ちる

失敗をした

自分はだめなのだとなじる

間違いをおかした

自分は最低なのだとのしる

一挙一動いっぎよいちどう

無駄なものに思える

自分はいらないものなのだ

自分勝手な感情が

心を覆おおい尽くして

暗く暗く沈む

痛い思いをすればいい

カッターやハサミと

鮮血のイメージ

悪くなっていくばかりの現実

声を張り上げなければ

何一つ変化などおきることのない現状

奇跡などは奇跡でしかない

暗い感情

死か罪か

罰か生か

選択することもできない

弱いだけの自分
終わりなど
訪れはしない

恐れは自分自身で
乗り越えることしかできなくて
謝罪しやがいや感謝など
声を上げればいいことで
それらをできないというのは
自分がしたくないからだけで
でも それは恐怖

暗く重く体を動かすのさえ
いやになる
逃げ出してしまいたいのだ
本当ならば
それでも

逃げ出さないのは
ここで逃げ出してしまったら
自分が変わることがないと
どこかで理解しているからで

たった一言
それだけが重くのしかかる
口に出せないのだ
自らのおごりの感情のせいで

くだらない誇りなど
捨ててしまえばいい
それでも

捨てられないのは

自分が弱いことを認めたくないからで

温かいゆりかごのような

居場所いしょほがあつたから

そこからまだ

抜け出せていない

言い訳をするならば

どうして「抜け出せ」というのだろう

「夢を捨てずに

やりたいことを追ひ

それでも現実に向き合え」という

そんな矛盾した意見に

従えるほど器用じゃない

だからいまだゆりかごを求める

戻れないと知っていて

戻ってはいけないのだと知っていて

現実から逃げたくなって

進みたくなる場所は

ゆりかごの中で

そこはもうなくなってしまうだろうに

私は手を伸ばす

気づくのが遅すぎたのだ

そこでどれだけのものを得たのか

そこでどれだけ自分であつたのか

気づくのが遅すぎたのだ

もう 今は 現実の中で

自分をなじり

自分をののしり

逃げたくても

逃げてはいけないという戒めいましの中に

息づいて

永ながらえて

鮮血のイメージを恐れて

体をすくませることしか

できないのだ

悲観ひかんでき的思考は死をもこえ

生きる地獄を作り出す

その思考から抜け出すことこそ

大事ではあるけれど

なぜ楽観らっかんてき的思考になれるのか

私にはわからない

悲観的思考の持ち主ゆえに心は暗く暗く落ちる（後書き）

暗い詩ですみません。

現在落ち込んでいる最中ですので、そのまま文に出てしまいました。

2011/09/15

今生の価値観の致命的なことと付箋へふせんへの貼へはられた人生という線

何か書こうとして

何も浮かばない時がある

そんなとき頭の中では

喜怒哀楽と記憶が

ぐるぐると

出たり入ったり

ごちゃまぜになって

駆け巡る

そんなものだから

時には気分が悪くなり

時には気分が良くなり

時にはふさぎこみ

時にははっちゃける

突発的に

突拍子もないことを

しでかして

何をしているんだろうと

自問する

感情に振り回されて

疲れ切ってしまう

それでもなんとか

文字を浮かびあがらせてみると

とても断片だんぺんでしかなくて

文章にならない

感情や想いのままに

書こうとすると

どこか言葉がずれていく

心が動く速さに

言葉が追いつかないのだ
いや違う

心の動きに見合った言葉を

私は知らないのだ

だからとても

よわよわしい

言葉の羅列られつが

出来上がる

そう

羅列でしかなくて

意味をなさない

文章になる以前の問題

言葉が一切の意味を

持たず

記号でしかなくなってしまうている

愛情への傾きがやってきた

誰かに一つ傾いているのではない

私は私にしか向けてない

悲観への傾きがやってきた

無能・無力・無知

無だけが飛び交う

どこか壊れてしまっているのだろう

そうでなければ

これが正常だともいうのか

私の思考は

ぐちゃぐちゃになって

ばらばらになって
こなごなになって
よわよわしい
言葉だけに支えられて
結論はやってこない

終わりも始まりもない
すべて続き

なにかを成り立たせるためだけに
息をして

自分は何かのつなぎでしか

ないような錯覚さうかくに
陥おちいる

そんなはずがある訳がないというのに

今生の価値観の致命的なことと付箋へふせんへの貼へはられた人生という線

何を書いているでしょうか・・・

すみません。自分自身がちゃんと理解して書くべきなのでしょう。

しかし、書くことを楽しいと思わなくなってしまつと、まったく書けなくなるのです。

こんな言い訳はしないほうがいいのかもしれない。

201

1/09/17

心軽やかに跳ね上がるも湧き出る恐怖

色の名などすべて覚えられぬ

物の使いようなどすべては考えられぬ

それでも

この心に浮かんだ名は

この心に浮かんだ使い方は

この心に羽をつけ浮かばせる

手に取りてひと息

眺めてみてひと息

至福のひと時

ぬくもりもすべてはわからぬ

寂しさもすべてはわからぬ

それでも

この心に入ったぬくもりは

この心に入った寂しさは

この心に喜びを注ぎはずませる

味わいてひと息

感じてみてひと息

幸福のひと時

ただ

別れのつらさが忍び寄る

我慢の痛みが突き刺さる

続かない幸福が寂しくなる

心踊りて
飛び回り
ああとため息
喜びの
嘆きの
驚きの
別れの
ああとため息
そして
心立ち止まり
至福のなくなつた
寂しさに
恐怖し
嘆く
ああとため息
大きいため息

心軽やかに跳ね上がるも湧き出る恐怖（後書き）

楽しい時間は過ぎていきます。

さびしくなる時間がやってきます。

でも、それもまた振り替える楽しみ時間なのだと思います、楽しい。
思い出のきっかけは、思い出の品。

2011/09/19

苦しみはすべて己の内から溢へあふれ出るもの

恐怖に押しつぶされながら

一人 孤独の戦いを始める

未熟ゆえに真っ白

未熟ゆえに真っ黒

何もないのだ

何を心に留めて

立ち向かうのだろう

何もわからない

一挙一動

すべて尋ねてみればいいのだろうか

歪んだ感情と

ねじ曲がった意識とが

現実に対すること

困難にさせる

誰もが通った道なのだ

己に言い聞かせようとしても

聞くことさえ拒絶するのは

自らの名前のせい

ただそれも言い訳に過ぎない

わかっているのだ

本当はどうしたらいいのか

それをしないのは

恐怖

それにつきる

一挙一動に
おびえて生きる
そんな毎日が
過ぎていく

いつまで
続くのか
現実と夢との
争い
私は何をしているのだろう

苦しみはすべて己の内から溢へあふれ出るもの（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

2011/09/20

泣かずにいる心が嘆きの叫びをあげる

会えない

会えた

聞こえない

聞こえた

触れられない

触れられた

ゆらゆらと心 波打つ

好きだから？

嫌いだから？

一人だと

強く思う

孤独ではないのだと知っても

一人ではあるのだと知る

届かない声は

呑み込んでいるだけで

届けようとしない声が

音になるはずがなく

ゆらゆらと心 波打つ

泣いているから？

笑っているから？

子供だと

強く思う

子どもではないのだと知っても
無責任ではあるのだと知る

聞こえない声は

耳をふさいでいるだけで

聞こえたとしない声が

音となるはずがなく

好きっていう心も

また偽り

矛盾に踊る日常

生きたい
死にたい
泣きたい
笑いたい

矛盾に貫つらぬかれた価値観
そしてこの感情

誰しもみな矛盾を抱えて
生きていることは
わかっている

それでも
自分になうものは
いないのではないのかと
驕おごる

美しい
醜い
強い
弱い

矛盾を抱えていることは
苦しい

それでも
“普通”ならば

気にしないだろう

矛盾に惑わされて
振り回されて

どちらかを

捨て去ることも

切り捨てることも

できずに

生きているということ

その中で

どうしても

愛したい

そんな人がいる

でも

その人を

殺したくなるほど

憎んでもいる

“普通”にありたい

でも今は矛盾に従う

愛しているのは

本当だから

ただ心が否定しない

殺したいと思う憎しみ

ただ

殺して終わるのならば

生きる必要もないので

生き続けて苦しみを

与えることのほうが
まだ自分の憎しみを
すべてぶつけているのでは
そう思う

そう生きていて
でも死んで？
そんな矛盾と
生きたいと
死にたいの
矛盾

てんびん
天秤が
傾いたときは
気をつけてね
何をするかわからないから
それでも
世界がある限り
天秤が地につくことが
ないように
頑張るよ

この先をまだ
見ていたいから
この先をもう
見ていたくもないのだけれど

矛盾してるから
どっかで
断ち切れる準備だけは

しておこう

そうすれば

矛盾に

少しは勝っているような

気がするから

矛盾に踊る日常（後書き）

まとまっていなくてすいません。

2011/09/23

夢

私は夢を見る

何かから逃げている夢

誰かと話している夢

戦場にいる夢

日常と同じ夢

夜に目を閉じ見る

私は夢を見る

話を作り人に伝える夢

故郷を多くの人に伝える夢

農林水産業を活性化させる夢

人と人をつなげる夢

昼に心を広げ見る

私は夢を見る

夢の話を伝える夢

夢を現実にする夢

夢がそのままな夢

夢とならない夢

昼夜問わずに見る

私は夢を見る

泣くために

笑うために

怒るために

明日のために

昼夜の支えに見る

夢を見て
夢に楽しみ
夢に走り
夢に浸り
夢で遊び
夢で進み
夢をあきらめる

私は夢を見る
夢が夢であることを知りながら
私は夢を見る
昼も夜も夢の中にあるように
私は夢を見る
息をする目的でもあるように
私は夢を見る
夢が夢でしかないことを知りながら
私は夢を見る

私は夢を見る
夢が夢である限り
それを追うことを
やめてはいけない
そう思いながら
私は夢を見る

夢（後書き）

読んでいただきありがとうございます。 2011/09/24

雲

もくもく

もくもく

もくもく

もくもくもく

もくもくもくもく

もくもくもくもく

空に浮かんで

もくもく

もくもくもく

もくもくもくもく

雨を降られせて

もく

もくもく

もくもくもく

形ができて

僕はほほ笑む

あれは犬かな？

あれは熊？

あつちはハート

もくもく

もくもくもく

今日は片隅かたすみに一つ

今日は空いっぱい広がって

今日は空のあちらこちらに形があって

もくもく

もくもくもく

風がいたずらするから

形がくずれちゃう

風が優しいから

太陽を隠して

影を作ってくれる

もくもく

もくもくもく

雲

くも

明日はどんな形があるかな？

明日はどんな色にそめられるんだろう

雲（後書き）

昼間の雲と夕方の雲は雰囲気違います。

太陽の位置で色がつくからだと思っています。

・・・ただ、気分の違いでしょうか？

読んでいただきありがとうございます。 2011/09/25

よみがえりし者の鐘

若者たちが戦場へ向かった
ひとりひとり家族と離れて
強欲な権力者の命令のもと
領土を広げるために始めた
戦場へとかりだされていった
戦場へと向かう道すがら
若者たちは満足な食事もできなかった
長年の戦争で疲弊した国に
兵士に配る食糧があるはずなかった
強欲な権力者のもとに
隠されているだけで
国に出回るはずがなかった
だから若者たちは休憩のたび
食べ物を探し道端をあさる
だがもう食べ物など見当たるはずもなく
空腹を抱えて戦場へ行くしかなく
飢餓で亡くなる兵士があれば
その身は道端に置き去りにされ
荷物のみ仲間に奪われる
病を患えばやはり置いていかれ
荷物は奪われる
孤独のまま苦しみ逝く
戦場では毎日死と苦しみと痛みとに追われ
空腹のまま時が過ぎる
敵国では食べ物があるらしい
と噂が流れた
毎日毎食満足に食べられるらしい

と噂が流れた

同じように戦争で疲弊しているのではないのか
と疑問を抱けるものさえ現れないほどに

飢えた兵士たちは

自国を捨てる計画を立てる

夜毎 将たちが飲む酒の匂いを恨み

焼きあがる肉の匂いに苛立ち

兵士たちはただ地に伏していく

ある晩 見張りの兵士は飢餓に倒れた

敵国はそれを見逃さず

陣は襲われた

将たちは兵士を鼓舞し

戦わせようとするが

飢えに飢えた兵士たちには

立ち上がる余力さえなく

あっけなく戦いは終わった

兵士たちは敵国の兵士に

ふるまわれた食事を喜び

亡くなっていった友や仲間を

今更ながら悲しんで吊った

そのときはまだ町に敗戦の報など

届くはずもなく

町に残る者たちは

親 兄弟 夫 友達 を想い

終わりの見えない戦乱に眠れない夜を過ごしていた

そこに響く鐘の音

うれしそうに

幸せそうに

町の鐘が鳴り響いた

そしてどこからか聞こえる声

その声は誰の声と言えないほど
さまざまな声が混じっていた

「戦争は終わった」

そう叫ぶ声がどこからか町に広がった

人々は鐘の音とともに喜びに沸いた

勝敗などはどうでもよかった

人々は戦争に疲れ果てていた

権力者の欲望にもう抗う気力さえなくなるほどに

だから声に 鐘の音に

人々は夜という時も忘れ喜んだ

同じように声を聞いた権力者はおびえた

どこかへ逃げ出そうと必死になって

金目の物を集めようとした

権力者はわからなかった

すべて人にやらせていたから

自分の家のはずなのに

どこに何があるのかわからなかった

召使いたちはみな知っていた

だから平等に全部をわけて

権力者の家から逃げた

町へ帰って家族と仲間と

すべてを分けて

新しい生活を探すために

一晩中鐘は鳴り続けた

人々は権力者をとらえた

少数の人間の欲望に

もう自分たちの生活を脅かされることのないように

人々は晴れやかに笑った

空腹ではあつたけど

兵士たちの無事がわからない不安はあるけれど

でも今戦争は終わり

権力者もただの人になった

だから悲しさも寂しさも空腹もあるけれど
うれしかった

喜びに踊りまわれるほどに

鐘の音が朝日がのぼるとともに止まった

ふと誰かが空を見上げて言った

「鐘を鳴らしていたのは亡くなった兵士たちだ」と

亡くなった兵士たちもうれしかったのだろう

もう苦しみの中にいる人々を見続けることがなくなるから

だから戦争の終わりを告げるために一晩だけよみがえってきたのだ
ろう

そう人々は話し合った

町の鐘がなる

今度は亡くなった兵士たちの弔いのために

戦いのねぎらいと戦争の終わりを伝えてくれたお礼のために

人々は一日中鳴らし続けた

道に水をまき

空に水をまき

食べ物がないうことを謝りながら

花をまき

花をなげ

弔いとねぎらいとお礼をこめて

戦場へ向かったすべての兵士に
亡くなってしまった兵士たちに

町の人々は鐘を鳴らし続けた

そして鐘の音にあわせて唄った

弔いを

感謝を

ねぎらいを

祈りを

幸せを

嘆きを

さまざまに唄った

亡くなった兵士に届けと

時が流れ

町の鐘が一日中鳴る日が年に一度

あの甲いの日

いわれを忘れても

話が断片になろうとも

前の晩に誰が鳴らすのか分からない

鐘の音にこたえるように

一日中町に響き渡る

その町の鐘は「よみがえりの鐘」といわれ

誰が鳴らすのかわからな夜の3回の鐘の音に

どこからか聞こえる多くの人の歓声が

その名にふさわしく年に一度訪れる

よみがえりし者の鐘（後書き）

2011/09/26

我は立つ

立ち上がれ！

どこまでも孤高ここうの人であるために！

立ち上がれ！

何者なにものにも屈くつしない柳やなぎであるために！

だがしかし

仲間を持ちてほほ笑め

だがしかし

膝ひざをつきてくやしがれ

受け入れて拒め

拒みて受け入れよ

ほほ笑みて怒り

怒りてほほ笑め

手に握りしめるものは

自らであれ

誰かのためなどと

言い訳をしないように

己おのれであり続けよ

時に人に屈しようとも

立て！

さすれば見えよう！

うずくまりし時に見えなかったものが

座れ！

さすれば見えよう！

立ち続けし時に見えなかつたものが

我は我であつてほかの何者にも
なれやしない

他は教師であり

他は鏡であり

他は我ではない

だからこそ

我は我でありえている

進め！

壁や谷など本当はない！

進め！

道など分かれてはいない！

進め！

見ているものこそが正しい！

進め！

裏切りにあつて信じよ！

進め！

己が己であるために！

ただ

壁や谷にあつるのはそう思うからで

ただ

道が分かれて見えるのは迷っているからで

ただ

見えていないものを信じてもそれが言い訳になるからで

ただ

裏切られなければ信じていたとさえ人は気付かない

ただ

己でなくなってもかまわない

泣くがいい

怒るがいい

おびえるがいい

それらは糧かてになるう

笑うがいい

あきらめるがいい

自信を持つがいい

それらは力になるう

さあ

我は立つ！

続け！

我は立つ（後書き）

ただ、個を大切にすること、
2011/09/29
もろ刃の剣にも似ているのです

秋の一幕へひとまぐ

ひら はら ひらり
はら ひら はらり
風がゆすつて落ちた
紅葉こうようした葉

ざわ ざわ ざわ
がさ がさ がさ
まだ落ちない葉が
風にゆすられて声をあげる

とて ぽて ぽとん
とす ぽす ぽとん
重くなつた木の実が
落ちる音

かり こり かりり
こり かり こりり
動物たちが冬眠前に
あちらこちらで食事中

かしや くしや
くしや かちや
落ち葉を踏んで歩く
乾いていたり湿っていたり

そわ そわ
そわ そわ

影が長くなつていく
寒さが忍び足

する する する
する する する

夕方の西空

秋の日のつるべ落とし

秋の一幕へひとまぐ (後書き)

2011/10/02

「ごめんなさいもありがとうも

ごめんなさい

すみません

謝れない私

言葉に出せない

だからどんなことにも

ごめんなさい

声にならないだけで

心の中で叫ぶ

そして

そんな自分が嫌で

いつもいつも

ごめんなさい

すみません

声に出したいのに

どんなことにも

誰であつても

声を出して謝らなきゃ

でも

言えない

勇気を出して

親友に

「ごめんなさい」

でも親友は首をかしげて

「謝られることは何もされてないよ」

ああ こんな親友がいてよかった

勇気を出して謝った

それが報われたわけじゃないけれど

「ありがとう」って言えた
そんな小さな幸せ
味わうことができてうれしいと思う

ありがとうなんて

言う必要なんてないと思ってた

だってみんながやってくれるのが当たり前
そののどこがいけないの？

お礼なんて言う必要ないじゃない？

今日も親友たちと一緒に

一人ぼっちの人間が馬鹿みたいに見える
友達が一人とか二人とか信じらんない

ありがとうとか

ごめんとか

そんなのそんなに必要？

わっけわかんない！

ま、関係ないか

群れている人間がわからない

なんで表面だけで付き合っているんだろう
でも

私には関係ない

私はただ

ありがとうと

ごめんなさいを

言えるようになればいい

いめんなさいもありがとうも（後書き）

ごめんなさいもありがとうも言えません。いえ、言えることは言えます。

でも、どこかずれているんです。ずれてる自分が一番嫌いです。2
011/10/06

書けない理由

書けない理由は

心がつるさく騒ぐから

仕事のこととか

寂しいとか

家族のこととか

恋愛のこととか

いろいろ考えるから

とめどなく思考が続いて

止まらない

でもなにより

飢えて

飢えて飢えて

飢えて飢えて飢えて

飢えて飢えて飢えて飢えて

飢えて飢えて飢えて飢えて飢えて

飢えて飢えて飢えて飢えて飢えて……

貴方が傍にいないくて

傍に温もりがなくて

愛情に飢えて

心が詰まる

だから言葉が足りないとかじゃなくて

言葉が出る余地なんか無いほどに

愛情に飢えているから

貴方を求めるだけになる

書けない理由（後書き）

お久しぶりです。 2011/10/27

さらば友よ

お別れの挨拶を君に

さらば友よ 愛した人

心 同じと幻想を抱いた私

苦しめただけ私も苦しめたなら

惜別の意を君に

さらば友よ 愛した人

心 苦しくなるのは私が寂しいと思うから

もっと多くの言葉をかわせばよかった

届かぬ祈りを君に

さらば友よ 愛した人

心から君の幸いさいわいを願おう

風の便りに鐘の音を聞くまで

忘れぬ怒りを君に

さらば友よ 愛した人

心に留めおこつ 君に見たものは私の行い

鏡のように映された短所

友情と人間と性別の愛を君に

さらば友よ 愛した人

心 すべてを傾けられないのは私が信じていないから

それは君だけに限ったことではない

憎しみと嫉妬を君に

さらば友よ 愛した人

心から君の才能に嫉妬し　それを認めぬ君を憎もう
私には何もないだろう？

親しみと温もりを君に

さらば友よ　愛した人

君に寄り添う友達が新たな出会いを運びますように
君だけの幸せを手にして欲しい

自らの人生に誰かのためという言い訳をしないで

君が君のままであり続けることを願う

ひとときでも君の傍に居られたことが幸せ

さらば友よ　愛した人

寂しさと怒りに揺られて私は泣く

さらば友よ（後書き）

罪でしょうか？人を苦しめることは
罰でしょうか？別れを悩むことは
罪も罰もありません
現実だけがあるのですから

読んでいただきありがとうございます

2011/11/

18

気づき

手を伸ばしてみても気付いた

私は独りが好きなんだと

他人を信じきれないから

どこかぎくしゃくしていく

他人を信じきるから

どこかぎくしゃくしていく

中間なんて存在していなくて

ただぎくしゃくする関係になる

恐怖と羨望によって曇りガラスの眼鏡をつけたまま

他人に接し

否定と侮辱によって城壁を築いたまま

自己に対する

反論と異論を知っていても

それを信じることができない

自意識過剰のままに生きてる

嫌な部分が増えていくだけ

手を伸ばして気付いた

私は私が好きで

私は私が大嫌いなのだと

努力しない人間にどんな価値があるだろうか

しかし終わりにしてはならない

時を止めてはいけないのだ

それは私が私に負けるとき

それは私が私を忘れたとき

それは私が私に涙しなくなったとき

きつと誰かのためにといい訳をしなくなったら

私は私を褒めて涙し

私は私に帰るだろう

それまでは努力しない私自身を

終わりと続きの境界線であがいていなければ

手を伸ばして気付いた

私が持つ世界はとつくに大きくなる準備を終えていたのだと

私が未だに追いつけないだけで

気づき（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

自分に対する見方は人それぞれ。もちろん他人に対しても。

2011/11/18

冗談でもなく一般的に言われる言葉が正しいと思う・・・進むためには

つらいと思うのは自分が弱すぎるから？

つらいと思うのは独りで寂しいから？

つらいと思うのは・・・

価値観の違いに惑わされて

価値観の違いに押しつぶされて

価値観に狂わされて

見失うものは自分自身でしかなかった

自分自身を見失ったら

分かるはずのことともわからなくなって

恐怖も孤独も強くなる

強くなる

逃げ出そうとしてもがけば

もがくほど

どうにもならなくて

つらくなる

つらくなる

そしてただ立ち止まる

どうしたいのかと

立ち止まる

問題が山積みなのに

そんなものはなかったようになる

消えてしまったことに

消してしまったことに

あわてる

どうしたいのかと

あわてる

手をつける場所がわからないだけ

わかっているのに
分らないふりをしているだけ
自分自身を守っているつもりだから
守ってなんかないくせに
傷つけることしかしていないのに
していないのに
強がって大丈夫なふり
本当はすべて投げ出して
本当を探すべき
探すべきだけどどうしていいのか
どうしていいのかわからない
そしてつらくなる
つらくなって立ち止まる

悪循環

ただ繰り返されるいつものこと
いつものことを断てばいいのに
恐怖に包まれる
包まれているという自己暗示
解決する方法？

一歩踏み出すだけさ

冗談でもなく一般的に言われる言葉が正しいと思う・・・進むためには(後書き

一歩踏み出すのが大変なんです。でも、やらなければいけないんですよね。踏み出さずにいたら、今と変わらない。2011/12/

18

歌くいつも心に

私は歌う 既存の曲ではなく
私は歌う 恋愛の曲ではなく
私は歌う 風に散らすだけのものを

空を仰ぎ 色を 雲を 父性を 母性を
木々を見 命を 時を 実りを 彩りを
花々を見 色を 種しゆを 香りを 儂はかなさを
地を踏み 声を 時を 母性を 父性を
風を感じ 声を 夢を 子供を 誘いを
心が叫ぶままに 讚たたえるままに 畏おそれるままに

私は歌う 留まる曲ではなく
私は歌う 記された曲ではなく
私は歌う 他人の耳に残らぬものを

海への 愛を 祈りを 恐れを
人への 愛を 羨望を 希望を
月への 夢を 憧れを 愛しさを
星への 夢を 物語を 距離を
鳥への 声を 羨望を 弱さを
命への 声を 絶望を 希望を
心が歌うままに ゆれるままに さわぐままに

私は歌う 決まりのない曲を
私は歌う 繰り返されない曲を
私は歌う 誰も知らないものを

歌 くいつも心に (後書き)

歌は神へつながるものでもあつたはず。それがいつしか、人と人を結ぶものになりました。それでも根底には祈りがあるはずなのですが・・・

罵倒を歌つてもそれはそれで祈りになるんです。・・・たぶん 2

0 1 1 / 1 2 / 1 8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170w/>

詩集 ~ 気分のままに書かれるもの ~

2011年12月19日00時53分発行